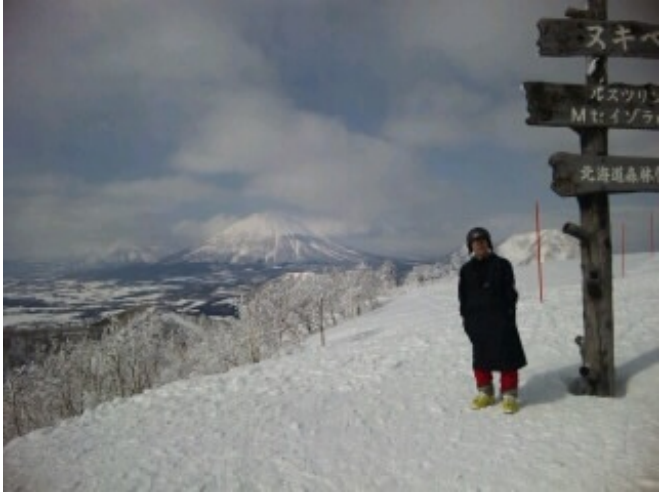

おすけ

おすけ

それはぼくと近所に住んでいた同級生のマサがまだ小学校の低学年生だった頃のことである。ぼくとマサは,中学生のヒモリと,ヒモリがしょうやんと呼んでいたもう一人の中学生に誘われて遊ぶことがたまにあった。ヒモリがマサを弟分のように思っており、ぼくとマサは気心の知れた友達だった。

ある夕、二人からリンゴを一個ずつ買ってもらい、桃太郎にきび団子をもらったキジやサルよろしく、どこへでもついて行きますという気持ちでぼくらはしょうやんとヒモリについて行った、緑色のすっぱくておいしいリンゴをかじりながら。

ぼくらの小学校、三原市立南小学校へぼくらは連れて行かれた。月の出ていない夕べで歩いていて数メートル先は闇だ。ただ自分たちの遊びなれて詳しい校庭だったので勝手はわかった。先頭をヒモリかしょうやんが行き、マサとぼくはお互いの体に触りながら、そしてリンゴを少しずつかじりながらついて行った。ぼくは、この奇妙で秘密めいた遊びのクライマックスがいつやってくるのだろうと胸をわくわくさせ、今にもいちびり声をちびりそうな状態だった。

やがてヒモリたちはぼくらを待機させ二人で水道の蛇口からしずくの垂れる水飲み兼足洗い場に沿って進んで行き校舎の角（かど）に到った。そこはもう運動場に面していた。そして角越しに向こうをのぞく。しばらくして足を忍ばせながら戻ってくるとまだリンゴをかじるぼくらに静かについて来いと言ってまた足を忍ばせ校舎の角に歩み寄った。ぼくらもそれをまねて音を立てないようにしてついて行った。

「ねえ、だれがいるんね」とぼくが聞くと、「ばか、静かにせんと聞こえるじゃなーか」とヒモリが笑いを必死でこらえながら低く言った。そして二人はかわるがわる角越にまた向こう側をのぞく。そして少々こらえ切れないでピッチの高い笑い声を漏らしていたぼくとマサに静かにするようにと口に人差し指を当て、「見てみい」と言ってぼくらにものぞかせようとした。しかしこの声を凝らしての「見てみい」がぼくとそして続いてマサの甲高い笑い声の押さえをきかなくさせた。明らかにぼくらは笑い声を上げた。するとしょうやんとヒモリが大声で「おすけー！」と叫び、ぼくらに「逃げ！」と言って走り出した。この「おすけー！」が運動場を囲む小学校と中学校の校舎にこだまして響いた。ぼくはとっさにこの遊びのクライマックスはこれだと察し、「おすけー」と叫んだ。そしてぼくもマサも笑いながら必死で走った。校門をかけり抜けて、バス通りに出て足をゆるめた時、みんなハアハアと息を切らし、ヒモリは「追っかけてこん、追っかけてこん」と商店の明かりに笑い顔を浮かばせて言った。ぼくとマサはまだリンゴをかじりながら二人について帰途についた。

おわり

注釈
「おすけ」は「すけべえ」の意味ですがインターネットで調べたけど、出てないので、もう死語になったようです。実話です。小中学生のアベックおどし、危ない遊びをしたものです。